

医家随想

大袈裟な表現

豊泉 清

平成 21 年秋に東京の博物館で奈良・興福寺の門外不出の阿修羅像の展覧会が開催された。その阿修羅像は、顔が三つ、腕が六本、つまり三面六臂である。残念ながら見学の機会に恵まれなかった。群馬県下では、昔から高校の修学旅行は奈良や京都の神社・仏閣を巡るのが恒例となっており、私も五十数年前に様々な仏像を拝観した。若い頃の見聞の体験が高齢になっても仏像や仏教思想に惹かれる下地になっていると感している（下図参照）。



他人の何倍もの大活躍する様子を「八面六臂」と形容する。顔が八つなら、腕は十六本でなければ動定が合わない。八面十六臂では発音し難いので、快い声調の四字熟語にするために、乱暴にも十を省略してしまったのではないかと、勝手に



に空想してみた。

阿修羅は、古代インドの言語である梵語の発音の漢訳である。漢字を単なる発音記号として利用しているに過ぎないから、漢字そのものに意味はない。アシュラとは古代インドで聖なる天上の神々に挑戦する悪神の名前だったが、仏教に取り入れられて仏法の守護神に変身してしまっただけで、阿が脱落した修羅も同じ意味で、闘争を好む悪神という原義から、激しい戦いの場の比喩として使われ、修羅の巷とか修羅場を潜り抜けるという慣用語が生まれた。

阿修羅の他にもインドに存在する他の宗教の神々が仏教に取り込まれ、中国を経て日本にまで伝えられた。帝釈天、弁財天、水天宮、閻魔、夜叉、毘沙門、鬼子母神、歓喜天、金比羅などは、本来はバラモン教やヒンズー教の神々だったそうである。仏教の神々は意外にも雑多な混成部隊である。

全国各地に、觀音山、地藏峠、薬師岳、普賢岳、大日岳、釈迦ヶ岳、華嚴滝、法師温泉、不動坂、如來堂、弁天町、羅漢町など、仏教や仏像に由来する地名がある。また日常会話でも、釈迦に説法、三人寄れば文殊の智慧、仏の顔も三度、知らぬが仏、馬の耳に念仏、地獄の沙汰も金次第、觀音聞き、阿弥陀籤など、仏教関連の成句や慣用句をよく口にする。一般庶民の日常生活に仏教が深く浸透していることを物語っている。

こんな言葉も仏教に由来しているのかと知って驚くことがしばしばある。例えば、刹那と億劫という言葉も仏教思想に基づいた言葉たそつである。仏教では一秒の何百分の一という極めて短い時間を刹那と呼び、億の何十乗という途方もなく長い時間を億劫と呼ぶ。刹那はほんの一瞬間という意味から、現在だけ満足すればよいという刹那主義という言い方が生まれた。億劫は余りにも長すぎて数えるのが面倒くさいことから、気が進まない

という意味で使われる。つまり刹那と億劫は時間の長短の両極にあって一対になっている。なお、亀の甲より年の劫(こう)のように、劫は単独で「こう」と読む。つまり億劫(おっくう)は慣用化した誤読である。

お寺の山門の左右に立っている仁王様の像は、一方が口を開け、他方が閉じている。これを阿吽(あうん)と呼ぶ。古代インドの梵字のアルファベットは、アが最初の発音、ウンが最後の発音たそつである。アとウンの漢字表記が阿吽である。英語のAとZのように、全ての物事の最初と最後の象徴である。阿吽には吐く息と吸う息という意味もあり、阿吽の呼吸は、二人の人物が協力する際に、双方の気持ちちがびたりと一致することを指している。

経済状態が非常に苦しい場合に、「台所が火の車」と形容する。火の車は、生前に悪業を重ねた罪人を地獄に送り込む火炎に包まれた車という意味で、やはり仏

教に由来する表現である。また仏教では我々が住むこの世は火に包まれた家のようだと譬えており、「火宅」という文語調の言葉もある。

やはり経済的に苦しい場合に、「金の遣り繰りに」「四苦八苦する」と表現する。四苦は人間の最も根源的な生老病死という四種類の苦を指す。その他に愛別離苦(愛する人と別れる苦)や、怨憎会苦(嫌な奴と出会ふ苦)や、求不得苦(欲しい物が手に入らない苦)や、五蘊盛苦(人体の五感から生じる苦)という四種類の苦もあり、合わせて八種類の苦があると仏教は説いている。四苦八苦も仏教思想に由来する表現である。

今は使われないが、未は博士が大臣か、という言葉があった。成績優秀な学生に期待する出世の象徴のよつなものが昔はあった。今でも同窓会などで、社会的に際立った活躍をしている同級生に、酔った勢いで「お前が出世頭だな」などと言つが、昨今は日常会話であまり出世とは

言わない。出世も経典に載っている仏教語だそうである。衆生救済のために仏陀がこの世に現れるという意味の出世と、俗世間を超越した仏門で修行を積む、つまり出家と同じような意味での出世があるそうである。そこから修行を積んだ僧侶が高い位に昇ることを出世と呼ぶようになり、さらに卒業式の歌の文句ではないが、一般人が「身を立て、名を挙げる」ことも出世と呼ぶようになった。出世した人物が、世のため人のために社会貢献をすれば、この世に現れた仏陀が衆生を

じょうじせ・ひんじょう

浅谷浩正

今日まで一人趣味で絵を描いて来ました。たまたま北多摩医師会展で白矢先生のお目にとまり入会を勧められました。今後、多くの会員の方々に見ていただく機会を下さり、有難うございました。

(眼科)

救済するのと同じかも知れない。

精進料理という言葉がある。肉や魚など、動物性の食品を摂らない昔の僧侶の食事である。また野菜のテンブラを精進揚げともいう。精進には「通りの用法がある。先ず仏道修行に励むという本来の用法は、努力と同じような意味である。潔斎と組み合わせた精進潔斎という言葉がある。潔斎は酒や肉類を断ち、齋戒沐浴して身を清める行為である。やがて酒や肉類を断つ潔斎の意味が精進と重複し、精進だけでも菜食主義を意味するようになった。用法が派生した。

話し言葉の「お坊さん」に相当する漢字語には、僧侶、和尚、坊主などがある。和尚も梵語の漢訳で、新弟子を指導する師匠を指し、徳を積んだ高僧に対する尊称だった。和尚を禅宗では「おしょう」と読むが、天台宗では「かしょう」と読む。また浄土真宗では「わじょう」と読んで、和上と書き、宗派によって読み方や漢字表現が異なる。

お坊さんの坊という字は、本来は防と同源で、洪水を防ぐ堤防を意味し、そこから町の区画も指すようになった。石川県金沢市に香林坊という地名がある。坊はまた巨大な建物も意味するようになった。兵庫県の有馬温泉には、他の温泉地には見られない、坊と名乗る旅館がいくつもある。僧坊や宿坊など、お寺の大きな建物も坊と呼ぶ。つまり坊主とは、本来は寺の建物の所有主、つまり坊の主だから、和尚と同様に仏道修行者の尊称だったと思われるが、生真坊主、乞食坊主、三日坊主、やんちゃ坊主、いたすら坊主、それに主を省略した暴れん坊、甘えん坊、けちゃん坊、食いしん坊、朝寝坊、風来坊など坊主や坊には軽蔑や揶揄のニュアンスが込められている。僧侶に面を向かって坊主とは呼ばない。和尚も坊主も同じ仏道の修行者だが、坊主だけに何故かニュアンスの異なる用法が生じたのだらうか。奇妙な現象である。

讀書三昧や贅沢三昧など、三昧(さん

まい」といふ言葉をよく口にする。他の言葉に続く連濁現象で「ざんまい」と濁って読む。三味も梵語の漢訳で、サンマイとは仏教界で精神を統一し、雑念を排除して到達する無念無想の境地を指し、三三という数字とは関係ない。読書三味は一心不乱に読書することだが、警沢三味のように悪いニユアンスでも使われる。私は診療の合間の短い時間を利用して参考書を繕きながら雑ネタを掻き集め、片端から億劫がらずに雑記帳にメモしておき、暇を見つけては駄文を綴って寄稿するのが趣味である。それを執筆三味と表現したら、大袈裟すぎるというて笑われるだろうか。実は大袈裟も仏教由来の言葉である。袈裟は僧侶が衣の上に左肩から右の脇に掛けて着用する長方形の布である。大きな袈裟という意味の大袈裟は誇張の比喩として使われる。ケサも梵語の音訳で、本来は赤褐色という意味だった。転じて東南アジアの僧侶が纏う赤褐色の僧衣を指すようになり、日本に入

ると僧衣の上から斜めに掛ける長方形の布だけを指すようになった。

仏像の展覧会の話題が契機となって、仏教に由来する言葉の語源を調べ、日常語として使われているが、原義から逸脱した意味や用法も併せて調べてみた。本稿のネタ集めをしながら、億劫や火の車や出世も仏教由来の言葉と初めて知って大いに驚いた。この調子で仏教語の語源調べを続けて行けば、ゆづりに一冊の本がまとまるほど、山のようなネタが集まるに違いない……と書くと、またまた大袈裟だと笑われそうである。

大磯 旧吉田茂邸

浜名 新

2009年3月22日午前6時頃、旧吉田茂邸から出火、邸は全焼した。総ヒノキ造りの母屋など合わせて1000平方メートルが灰になった。不審火か漏電

か？ 歴史的建造物で、非常に残念というほかない。

私は同年2月19日、東京新聞主催の旧吉田茂邸見学会に参加し、見学する機会があった。昭和44年西武鉄道の所有になったそう、見学会当日、大磯プリンスホテル職員の男性氏から纏々説明を受け、広大な敷地を散策し、本邸の居間と応接室に入る機会があった。今となってはまことに幸運であった。その日、他の旅行会のバスがひっきりなしに来て、大磯の超巨玉の観光名所となっているようだ。東京新聞のツアーでは、鴨立つ庵、大磯プリンスホテルの和食膳と、城山公園散策並びに曾我梅林観梅がセットになっていた。

旧吉田茂邸は、明治17年(1884)年に吉田茂元総理大臣の養父が建て、およそ1万坪の海沿いの小高い丘陵地であり、眼下に大磯の海岸と海原が一望できる有数なロケーションである。戦後、総理大臣として外国貴賓を招くため新築

2階建、建坪300坪の和風建築の本邸といくつかの建物と門、7賢堂、池、故人の銅像、犬の墓、築山と竹林がある。神奈川県は西武鉄道から敷地を買い取り、県立大磯城山公園と対で、公開する予定であるとのことでした。

日本の戦後政治を担った歴代首相30人のうちすでに20人が鬼籍に入り、「国葬」で言まれたのは吉田茂（1878-1967）ただ1人である。

彼の生前、日本のみならず海外からも著名な政財界人が大磯詣をしたという。

「こんちは・ひとこと」

篠 上 治 彦

オペラ・ミュージカル、小和田正
まで、新国立劇場、東京ドームまで
芸術大好き人間です。また、大洗、
桜ヶ丘、海外までゴルフ大好き人間
です。よろしくお願い申し上げます。

(眼科)

その面会場所は本部（邸）の応接室と居間であろう。東大卒、イギリス大使、宰相、サンフランシスコ講和条約、バカヤロー解散、話題性の豊富な保守政治家の宰相で、戦後日本の「基礎」を築かれた「偉人」である。

邸内のバス駐車場から少し東に進むと「兜門（講和記念門）」がある。「心字池」がある。「7賢堂」には明治黎明期の革命家である三条実美、岩倉貞観、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、外交官の西園寺公望、吉田茂の遺影が祀られてある。ノ

ーベル平和賞を授賞された佐藤栄作「宰相は、故人を合祀して「7賢堂」を建立したという。

故人は犬好きで、サン、フラン、シスコ、ブランドー、ウイスキーなど奇抜なネームをつけ、愛犬を連れての散歩が日課で、愛犬の墓もあった。葉巻が好きでドミンゴ産、ハバナ産を好んだという。眺望のよい高台に故人の銅像が建てられ、視線は遠くUSAのサンフランシスコ

へ向いているという。

見字が許された邸内の1階の右手にある応接室にある12畳くらいの板敷きの部屋には、椅子とテーブルは往時のままのよつで、壁の飾り棚には、貴賓者とのスナップ写真が飾られ、太平・カーター会談は居間で行われたという。居間には蒋介石総統から寄贈された、裏表に描かれた墨絵の4連の「屏風図」が飾られ電氣仕掛けとなっていた。

西側の大きな1枚ガラス窓から、しだれ白梅が咲き乱れ、遠方に冠雪した富士山が浮かぶ構図はすばらしい。故人のお気に入り景色だそう。北側に崖が迫っている。故人は機嫌がことのほか麗しいと、使用人に崖から水を流させ、「薄が流れているぞ」とこ満悦だったそう。いかにもありそうな茶目つ氣たっぷりな功なり名を遂げた好好節を連想させる挿話ではないか。ツアー客に対する解説の中身は多少膨らんで確信に満ちた伝説となっているにしても……。

冬の眺め

有泉 七種

熱帯樹

昔、ゴルフを楽しんでいたころのこと。いまも昔も変わりはないが、冬季にはいると、信州のゴルフ場は、春の雪解けが終わるころまで閉鎖となる。そのため、冬季にゴルフを楽しむためには、暖かい東海道方面にまで出がけねばならない。こんな冬のある日のこと、岡崎の町で仕事をしている友人の招待で、勝手気儘に話し合える、親しい仲間が集って、ゴルフを楽しむことになった。

土曜日の仕事を早めにきり上げて、飯田線の乗客となり、東海道へと急いだ。トンネルを、ひとつひとつ抜けぬぐると、車窓の眺めは明るくなる。それにとまなつて、旅の心も浮き立って、指定された宿に着いた時は、春のような明るい気持ちであった。そして、置酒歓談の一夜を

過ごし、翌日、明るいゴルフ場でのプレーを楽しんで別れた。

帰りの列車までには時間があったので、近くの食堂にはいった。暖かい、とはいっても冬である。暖房のきいた食堂は「こちよい。さほど広くない室内の一隅に、鉢植の常緑樹があった。見かけたことのないような植物である。熱帯植物だろうか。広い、厚い、緑の葉を下垂して、疲れ果てたような姿をさらしていた。

暖房のグリルに疲れ熱帯樹

小春日和

娘夫婦の住居は、甲府市街を北にはなれた、武田神社に近いところ。そんなことから、娘夫婦の所を訪れたときは、武田神社の境内に遊ぶことが多い。

十一月初旬ではなかるつが。この日も、孫たちとつれだつて、武田神社の境内で、楽しいひとときをすごした。折から、暖かい小春日和。家族つれや親子つれ、また、若い男女のカップル。それに

加えて、大型バスでの、老若男女の観光客など。境内は賑わっていた。

はじめて、武田神社に参拝したのは、甲府中学（旧制）に入学した年（昭和九年）の春であったから、もう半世紀以上も昔のことになる。また、学徒出陣で出征してゆく友人の武運長久を祈願したのも、遠い昔のことになってしまった。月並みの言葉だが、月日の流れさるるのは早いものである。と、そんな想いに耽るひとときでもあった。

山寺に時のすぎゆく小春かな

後日、俳友のひとりには、「武田神社八寺デハナイ！」と言った。「ダガ、コノ神社ニハ武田信玄公方祀ラレテイルノダカラ、寺アモイデハナイカ！」と反論したが、自己弁護たるつが。

家郷の冬

父の没後、母は郷里で、ひとり暮らしをしていた。そのため、郷里をおとすれ、隣近所や親戚縁者に挨拶する機会が

多くなつた。さらには父が、生前、小学校校長や村長など、村の要職についていたので、それにかかわる冠婚葬祭などにも出かけねばならないことが多くなつた。

私の生まれ在所は甲府盆地のほぼ中央いまは、周辺の町村と合併して中央市となつているが、昔は稲作を主とする農村であつた。そのためか、本家を中心にして、親類縁者の住居が集まる傾向があつたらしく、いまでも、その形態を保つてゐる。そのため、母も、十数年にわたつて、ひとり暮らしができたのであろう。小正月もすぎたころ。おくれればながら、新年の挨拶がたがた郷里をおとすれた。この年は、寒ソにはいつてから、きびしい寒さの連続で、甲府盆地にはめずらしい真冬日の凍であつた。母の住む郷里の家も、周辺の親類縁者の家々も、さらには、その家々をつなぐ道までも、深閑として、大寒の凍に耐えているよつな眺めであつた。

家々につながる道も凍の中

開業ABC

中村 雄彦

平均寿命

平均年齢がまた延びた。女性86歳、男性79歳（2009年7月17日の朝刊）。特に男の79歳は驚きである。以前せめて平均寿命まで生きたいと思つていたが、また大分ある。

昔家内に冗談に「俺は天才だから82歳で死ぬぜ」と言つたことがある。当



赤坂の旧東京ヒルトンホテルで（昭和58年）

時岡本太郎、浜谷浩（写真家、私の叔父）は82歳で死んだ。あれから10年、最近では加藤周一、土居健郎（精神科医師、甘えの構造の作者）、川喜多二郎（いずれも敬称略）と著明な天才的な学者・評論家が相次いで89歳で亡くなつてゐる。78歳は確実に死ぬのは延びた。

古くはショーペンハウアー72歳長命といわれたゲーテ、カントは80歳と少し、一万円札の福沢諭吉は66歳驚くことはない。時代が大いに関わる。

私自身人様より早く開業したので、何時までも続けずに早く引退しようと思つた。10歳ほど年上の大学医局の恩師が定年になつたら潮時と思つていた。その教授も亡くなつたが、弟子の私は往生際悪く未だに現役である。

若い時は老人をみると「何で何時までも生きてゐるのか、詰まらない一生を早く終えればよいのに」と思つていた。しかし老若立場が変わると「転々、兎に角とつでもよいから生きたい」と思つ。人様

からみれば、何で喜んで生きているのか」と思われる実に無意味な生涯だったが、本人は結構面白い。

「長生きはしたいが寝たきりや不自由な体では困る」とよくいわれる。しかし寝たきりになっても、それなりに暮らせて愉快かもしれない。親友のW君は数年前から脳卒中で不自由な身だが、学会こそ出席はしないが、種々の出版物に素晴らしい文を書いている。たとえ認知症になり意思の疎通はなくなっても、本人にとっては面白い人生で死にたくはない。

「こころはほ・ひびく」

奈良林 滋

先日「めまいときこえの懇話会」世話人会の席上、白幡雄 先生から医家芸術の写真展があると知らされて我流でお恥ずかしいのですが版画を出させて頂きます。(耳鼻咽喉科)

周りで勝手に「お気の毒に」といつているだけである。「もう死んでもよい」などいつているのは、ぴんぴんしている人間のいうことで驚沢である。いざ死ぬとなれば何とか生きたいと慌てだすに決っている。

昔高名な学者が「橋大学だと思つが、一流大学に講演に行つて、司会の学生に「先生は老来ますますお元気で余命幾ばくもなく、枯れ木も山の賑わいです」と紹介されて面食らつたと新聞で読んで大笑いした。その講師も今からみればそれほどどの歳でなかつたのである。最近も後輩の40歳台の医師から「せめて先生(私のこと)位長生きしたいです」といわれて複雑な気持ちになつた。言葉を知らないといえはそれまでだが、率直といえは率直、若い人からみれば長生きをしている者は皆一括、娯楽で山的存在なのである。」「こつした駄文を連ねているお前は長生きするよ」といわれそつだが、先のことは全く分からない。

礼文華越え

御園生 潤

昨年の夏は天候不順で、道内では低温多雨、全国的にも台風による豪雨等で農作物の不作、道路・家屋の被害が相次ぎ発生し、厳しい夏となつたことは記憶に新しい。

このような中、8月8日にお盆の混雑に先行し半日のフリータイムを得て、かねてから狙いをつけていた景勝「礼文華峠」の夏の姿を列車車窓から満喫してきた。

往路はキハ281系の振子特急「スーパー北斗6号」(5006D函館行)で、まず洞爺へ向かつ。この列車は手稲からホームライナーとして札幌駅6番線に発車時刻の約30分前に入線しているので、早めに自由席を確保できた。出発時点で自由席の埋まり具合は6割ほど。

女性客室乗務員のアナウンスが流れて

新札幌着。この日の天気予報は「曇時々晴」であったが、霧がつつすらとかかっている。南十歳到着、新十歳空港の滑走路にも着陸機を誘導する照明灯が煌々と輝いていた。

登別、東室蘭とやや視程の悪い中を過ぎ、定刻運行を続けていたが、伊達紋別の手前の稀府(まれつぶ)で停車した。乗務車掌のアナウンスは、「対向列車遅れのための待ち合わせ」とのこと。室蘭本線には単線区間が残っている。伊達紋別周辺では「稀府〜洞爺」間で、列車ダイヤのやり繰りの難しいところだ。ちなみにも本線の苫小牧〜岩見沢間にも単線区

「こころはは・ひんじり」
 萩野公嗣
 しほらくお休みしていました。再入会です。よろしくお願ひ申し上げます。
 (眼科)

間がある。

5分ほどで、遅れの寝台特急「北斗星」(1レ)が通過していった。まもなく発車し、車掌の丁寧なお詫ひと遅延理由の



説明があり、海沿いに出て伊達紋別着。今回のように「オ」フで列車に乗している分には多少の遅れは我慢できるが、こと

ビジネスや緊急の用事の場合には、列車遅延は致し方ないことと了解しつつも、いら立ってしまうものである。そうして生活を10年間続けた経験から車掌の心の籠ったアナウンスが痛いほど理解できる。
 通いなれた伊達紋別の駅を発車すると、

水田地帯に入る。次の「長和(ながわ)」では遅れの「スーパー北斗3号」(キハ281系・5003D)が待ち、こちららが通過する。警笛を鳴らしあい交換した後有珠、北入江信号場とコマを進め、7分遅れて洞爺着。ほぼ10年振りに同駅に降り立った。

洞爺駅前の様子は当時のままであった。ただしサミット効果か、駅の諸設備(発射案内等)が改善され、札幌圏の様相を呈していた。駅前のロータリーの花壇の花が色とりどりで美しかった。

洞爺駅で20分ほど待た後続の普通列車(長万部行474D)に乗車する。この日は先頭がキハ40系で2両目がキハ150系、3分遅れで発車。予想に反して空席が目立った同列車の1両目で、窓を開け夏の外気を満喫、やがて列車はトンネル地帯に入る。次の豊浦では、2両目の分割(折り返しの東室蘭下行り普通列車となる)作業と、後発の函館行特急「北斗8号」の追い越し回避で、待避線



礼文華の大カーブを行く函館行特急「北斗」(JR室蘭本線
礼文~小幌間=昭和63年9月 筆者撮影)

の2番線に約15分間停車のダイヤ。こ
で3分遅れを吸収して定刻発車した。大
岸、礼文と停車していく中、連続するト
ンネルとその切れ間から見える奇岩、景
勝が印象的であつた。キャンプ場、海水

浴場も人影、テントが少なく、冷夏の影
響をつかがわせた。

礼文を過ぎると、いよいよ「礼文華峠」
越えにかかる。国道が右側の上を走り鉄
路は急な勾配に差しかかる。室蘭本線の

全通に際して最大の難関と
つた区域である。やがて左方
一ツの上り勾配になり、旧線
時代の狩勝峠を彷彿させる風
景となる。新礼文華山トンネ
ルを抜けるとトンネルとトン
ネルの間の「小幌(こぼろ)」
駅に停車。あえぎながらの単
行キハ40の峠越えも一息つ
く。若者9名が乗車。私にと
つては小幌駅での停車は2度
目の体験であつた。静狩を経
て、定刻に長万部到着。連続
する小樽行(山線経田)の普
通列車がすでに入線している。
はりキハ40系+キハ150
系の2両編成である。私は折

り返しの「スーパー北斗7号」(キハ28
3系)で札幌へと引き返す。

11分遅れの発車となつたが指定席も
何とか取れ、振子特急の2種のエンジン
音を満喫・比較しつつ札幌駅へと帰着し
た。天候も持ち直し、伊達紋別のあたり
からは太陽が顔をのぞかせ有意義な1日
を過ごせた。

鉄道を愛する医師たちは意外と多い。
興味の対象は各人で異なるが、エッセイ、
会話等を通してその博学ぶりがうかがえ
る。私はかつて鉄道写真の撮影が対象で
あつたが、当直を持ち体調を崩せない現
在は、非常にエネルギー・時間・辛抱の
要るこの「鉄道写真」から、乗客の1人
として車内で鉄道を楽しむように興味が
変わってきた。そして若き日に撮影した
少なからぬ鉄道写真を見返している。

(北海道医療新聞1月8日付から転載)

羽田沖事故(3)

二産業医の叫び

穂 効 正 臣

私は、昭和四十八年に日本航空の常勤医になった。四年後の昭和五十二年四月に羽田沖墜落事故が起こったのである。それを契機に私の運航乗務員に対する考え方が変わった。

それまで、運航乗務員(パイロット)の健康管理は私の分野ではなかった。その頃、私は運航乗務員に対してあまり同情的ではなかったし、むしろ「ストライキ」ばかりする彼らに嫌悪さえ覚えていた。

しかし、羽田沖事故後に敵しさを増した旧運輸省が行った運航乗務員航空身体検査には目に余るものがあった。そのよくな状態を深く知るにつけ、私は心の動くのを感じていた。

当時、日航には健康管理室が運航乗務

員に対するものと、その他の職員に対するものと二つあった。事故時、運航乗務員の健康管理を担当していたのは同級生のY医師で、彼は事故後責任を取らされたかたちで私の方の健康管理室に転属された。

率直なところ運航乗務員健康管理は航空法に定められたものしかやっていなかった。

私の担当する分野は、整備職、客乗職一般職で、本社機構の一つとして、医師の数や施設なども運航乗務員健康管理室より格段に上回り、内容も充実していた。国際空港の成田展開に際し整備職の人々は人間ドック並みの健康管理を望み若年者であっても年二回の胃レントゲン撮影や心電図検査を行っていた。これに対して運航乗務員の血液検査の数などは僅か五項目であった。

常勤医となる十年前から、私は週二回アルバイトで日航の羽田地区診療所の非常勤医師となっていた。そこでは昭和四

十二年に早くも「社員の健康管理」を行うようになった。今日、一般的に使われている「健康管理」という言葉さえなかった時代である。

ある日のこと、羽田管理部福利課係長のY氏が医師を集めて

「これからは羽田地区で職員の『健康管理』を行う」と言ったのである。

それは医師である私にとってはショックであった。医者が次第に要らなくなるのでは、という心配が胸に沸いたからである。それまでは病気になるまで個人管理に任されていた。会社が率先して社員を勤務時間中に健康チェックのために呼び出すようなことはなかった。

これまでも体調が悪いと言って離職して診療所に来る人もいたが、今回始まったのは、午前中の一定時間に、強制的に健康検査のために呼び出す、というものであった。

従業員を強制的に医師が検査するとい

うことは「身体検査」をのぞけばそれまでになかった。企業内の疾病予防目的で職員を呼び出すことなど革命的な出来事だったと言える。振り返れば、非常勤時代に健康管理（疾病管理）を比較的早期に行なっていたが、これは病気になるてしまつてからの強制的な治療で、予防的な意味合いは少なかったと思われる。

冒頭で私は昭和四十八年に日航の常勤医になつたと述べたが、その切掛けは産業医制度が出来たことだった。日航から私に産業医に、との要望があり、それを受けたのである。

健康管理課発足当初の医療スタッフはドクター二名、ナース三名であった。それは羽田の狭くて暗い部屋に血圧計と聴診器、それに電話一本だけの貧弱なものであった。

健康管理業務担当の事務職は羽田から遠く離れた都心の本社におり、われわれ医療スタッフだけでは何から始めたらよいのかさえ見当もつかない有様であった。

健康管理を担当するようになったが、「健康診断」を行う以外には日常生活の予防的なものはまずなかった。

こんな状況の中で、東海大学の社会体育学部教授を自宅に訪ね、白航職員の「体力づくり」をお願いした。こうして日航の健康管理は体力測定から始まつた。この業務は羽田ライン整備工場を皮切りに開始され、やがて客室乗務員に関しては「Kデー」なる名称で、「一日健康の日」が設けられた。さらに、昭和五十一年の客室乗務員の入社試験には体力測定が導入されたのである。日常の身体検査は、現在の「人間ドック」並みの内容であった。さらに、それまで年間の一定期間に限定していた身体検査は、生年月日を基準に通年に均して行うようになった。私が日航に勤務していた期間に事故ハイジャックなどがすべて集中したと言つていい。

最後の事故が「御巢鷹山」の航空機事故であった。私が退職後は一度も航空機

事故や事件は起つていない。常々苦勞の多かつた時期と言えるが、こうした事故事件がわれわれ医師やナースの存在を必要とし、その一方で健康管理の充実に繋がつたと言つてもよい。

私が運航乗務員の健康管理を担当するよつになつたのは、羽田沖墜落事故の四年後であり、事故直後にパイロット担当だったY医師に代わつたのは、慈恵医大出身のH医師であった。

言つてももなく、事故後運航乗務員に対する健康管理をより厳しくする必要があるとの認識が生じたのは当然のことであつた。

ところが、運輸省の作成した新しい基準はあまりにも厳しく且つ非常識であり、少しでも基準から外れると不合格とされたため、離職する運航乗務員が多数発生した。

彼らは、このような規定の作成に協力した慈恵医大の医師たちを恨み、そのとばつちりを慈恵医大卒の私たち産業医に

までも向けた。

こうした状況の下で、運航乗務員の健康管理体制を確立すべしとお鉢が私に回ってきたのである。

私は心諾しなかった。そして、中東地区の巡回診療に出かけた。ところが、なんと健康管理部長のH氏がその巡回についてきたのである。そして、彼は運航乗務員の健康管理の直面する苦境を訴えた私の考えが変わった。

こうして運航乗務員の健康管理を引き受けることになった私は、いくつかの条

こうしては、ひとこと

石山英一

今回は私用（法事）と重なり誠に残念ですが懇親会場で皆様に誤挨拶出来ません。「医家芸術誌」で勉強し次回に出品させて頂きたい存じます。宜しく御願ひ申し上げます。

（耳鼻咽喉科）

件」を出した。会社側はそれらすべての条件を飲んだ。かくして全社員の健康管理づくりの体制がはじまったのである。

やがて健康管理だけで東京、成田地区で百四十人（うち常勤医十三人）の医師が配備され、CT、MRI、カソードプラー、ホルター心電図、胃カメラなどの設置も充実された。その結果、航空関係の研究も行われ、海外の学会発表が年に十件以上にも及んだのである。

私は入社して数年後に各国の健康管理を視察して回った。その際、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツなどのエアラインの健康管理施設を視察したのは言うまでもない。私が日航を去る頃にはそれらの国に比較しても劣ることのない立派な健康管理体制が出来上がっていたと確信して言う。

現在、日本航空は業績不振企業の再生のために国と金融機関に支援を要求しているような状態だ。その結果、健康管理体制が衰退し、殺伐たる状況下にある。

医者も仕事に対する意欲をなくし、ナースも辞めて士気の低下が甚だしい。日常の健康診断は外部に依存し、効率の悪い仕事に陥っている。会社が声を大にして叫ぶ経費節減のつもりが、かえって高値なものになっている。運航乗務員に身体のこと事故が起きたならば、この会社は終わりである。運航乗務員の健康問題は、運航乗務員だけの問題ではない。それは、お客の命を守ることもである。人の数を減らすことばかり考えていて、安全に繋がる健康管理が有効な投資であることを忘れてはならない。

高齢社会となった今、企業も自社職員の健康の大切さを十分に認識していることである。しかし、この認識が現実を生かされるかどうかは、あくまでも企業業績が良い時の話であるように思われて仕方がない。

安全を最優先する公共機関たる企業は、業績が悪いからと、職員の命や健康をないがしろにしているものであろうか。

蝶の楽園（私と蝶の物語）

第二話 チョココ大好き

大塚 博太

それは九月十五日の朝のこと、何気なくベランダに置かれてあるレモンの鉢植を眺めていると、一枚の葉の上を一輝位



レモンの葉に白と黒模様の幼虫が2匹、アゲハのようだ

の黒い線状の虫が動いているのを見つけたのです。そして虫は日毎に加速的に大きく成長し、白と黒のまだらな幼虫と変わっていったのです（写真④）。
よく見ると、白と黒模様様の虫が一匹、また緑色の虫が一匹見つかりましたが、形態がらして、やはり蝶の幼虫に間違いないな感じです。

そして私は、この子供達に名前をつけて観察してみようと決めたのです。名前はすぐに決まりました。蝶の子供だからチョココ、そしてチョコレットは私が毎日口にする大好物の食べものなのです。その日のうちに色別にグリーンチョココ、ブラックチョココ、と呼びながら話しかけていったのです。そして、いつの日かこの子供が成虫になったら、今度は羽根の色で呼ぶようにしようかなと、考えているのです。

そして、以前時いておいたオレンジの種が芽を出して押し合っている

すすくと育っているオレンジの幼木



のを見つけ、丁度この九月の三連休を利用して間引きをして植え替えたのですが、オレンジの幼木も今までと違って、伸び伸びと育つことが出来て嬉しそうに私は感じられたのでした（写真⑤）。

春までには、どんなに成長するか楽しみに待っているのです。

私はこの三連休を総べて可愛い蝶の為に使えたことを嬉しく、また気持ちよい満足感に浸ることが出来たのでした。

そして九月二十九日、それ迄いた幼虫達はいつとはなしに姿を消し、この日に最後の一匹も見えなくなつたのでした。

これから迎える冬に対して、蛹になつて寒さを越すのかなと考えているとき、蝶の羽ばたきを耳にしたのです。それは薄ねすみ色の小さな可愛い蝶でした。早速、図鑑を調べシジミチョウ科の一種で夏にも飛んでくることを知つたのです。そしてカメラを持って戻つてきたときには、もう姿は見当たりませんでした。色々教えてくれて有難う、そしてきつとまた遊びにおいでよね。

今年の初夏の一刻を楽しく過こさせてくれた蝶さんたちよ、来年もまた大勢の友達を連れて飛んできておくれ、あなた達に素敵な居場所を作つて聞つているからね。

ジエノヴァ 懐古旅行(1)

美濃部 欣平

1962年に、私にとつて最初の外国留学となるイタリア政府給付留学生として滞在した北イタリアのジエノヴァへ、昨年9月18日、23日まで6日間、約半世紀ぶりに再訪した。ジエノヴァは過去も、現在でも古い港湾都市で、ミラノに次ぐ大都市。市の中心地、フェラーリ広



ガリバルディー通り 白の宮殿、赤の宮殿、ドーリア・トゥルシ宮殿がある

場から四方八方へ広い道路が走り、地下鉄、バス、タクシーが客待ちしている。そのひとつの道、「九月二十日通り」入り口の近くにある古いホテル、プリストリア広場まで続く、長い通りで、車道を挟んで左右に細長い歩道が続く、にぎやかな通りだった。

私はその通りを、留学時代一番多く利用した。ピクトリア広場を過ぎると、狭い路地になり、その露地の西側には、小さな商店が並んでいた。

クリーニング店、雑誌屋、下宿屋、映画館などがあり、私が休みの日など、よく行き交つたり、買物をしたりしたものだ。私はその路地から、また大きな通りの川の近くにある学生寮(カーサデリーシユテユンテ)が、私の二年間の留学中の宿

ソラーナ門 12世紀に地中海を制した海洋王国ジェノヴァの権力の象徴



となった。

半世紀後 私は再びイタリア航空でミラノを経由し、タクシーでジェノヴァへ向かった。私が留学したのはジェノヴァ大学医学部神経外科だったが、タクシーの運転手に連れて行かれたのは、神経内科の病棟だった。そこはジェノヴァの郊外、サンマルチャーノ地区にあった。

待合室で散々待たされた挙句、私は待ちくたびれて、もとのタクシーでフェラーリ広場へ戻った。私の予約したホテル

はウェンティ・セツテンブレ（九月二十日大通り）の三軒目にあった。フェラーリ広場は、ジェノヴァ観光の出発点であった。そこには多くのバスやタクシーが客待ちしていた。

私たちの観光も、この広場を中心に始まった。小さな町なので、先ず歩いて古い貴族の館が密集するガリバルディー通りから始めた。ここには白い王宮や赤い王宮といわれる宮殿群があり、一番富裕者の多い通りだった。この通りは古くはストラータヌオーヴァ（新しき道）と



④ジェノヴァ大学医学部神経内科外来患者待合室の表示の前で筆者 ⑤サン・マッティオ広場にある日曜露天マーケット、買い物客で賑わっている

も言われた。商店が密集する路地を抜けるべく、港に出る。港は私が日本を出て、イタリアへ入国、出国したときの思い出の港だった。

その港からトロリーバスに乗って、山のほうに向かって町を一巡する。ホテルへの帰途、有名なロンプスの生まれた家の跡に立ち寄る。広場に戻りパルでサンドイッチとカプチーノをいただく。

